

飽くなき挑戦から国内唯一の一貫生産へ

医療機器用の樹脂ボール

(有)アプラス



草創

プラスチック製品の製作は奥が深い。顧客より送られてくる図面をもとに金型を作り、試作・検証・生産を手掛ける。

同社はプラスチック成形を手掛ける企業として、この地域に平成2年に創業。当時、関東方面では脱サラをして、プラスチック成形業を始める者が少なくなかった頃、この地域には金型を製作する企業はあったが、試作・生産を担う成形を手掛ける企業がなかった。「成形をやってくれるところはないか」という地域の金型メーカーの声に応えたのが同社だった。



成形前のペレット。平均1mm×2mmほどで、最大320度で熱する。

変局

リーマンショック。2008年の世界的な金融危機の代名詞だ。この余波は同社まで達していた。当時の大口発注が途絶え、約半数の仕事を失った。5年もの間、苦境に立たされ、金融機関からの借り入れもままならなかった。そんな時、大口ではないが取引のあった医療関係メーカーから、思わぬ話を持ちかけられた。海外から仕入れていたものを国内生産に切り替えたいという要望に近い依頼だった。樹脂ボールの成形だった。ここから同社は、社運を賭けて樹脂ボール製作に舵を切る。もともと球体の成形に興味があった。どこから見ても角が無い、滑らかな曲線の輪郭。プラスチック成型を手掛ける者として、いつか製作してみたいと野心にも近い願望だった。

模索

成形後の削る工程で、球体ゆえに固定する方法が難しかった。参考にするための視察先もなかった。ものづくりの根本的部分が試される状況になった。「考え付く術すべがあれば、すぐ100円ショップに走って、試行錯誤を繰り返した」と野上さんは話す。削るための装置を手探り状態から自社開発にまでこぎつけ、50マイクロメートルの精度を保って削る調整には、さらに半月を要した。

仕上げの研磨に取りかかると、また壁に当たった。回転方法や研磨材を何通りも試したが、光らなかつた。ツヤが出なかつたのだ。あらゆる手段を使い果たしたと思っていた頃、ようやく光るツヤが現れた。ここまでたどり着くのに2年半の歳月がかかった。

貫徹

「本当に嬉しかった。自慢できる物ができたんだ」と当時の気持ちを語る。発注者は出来映えに驚いて、生産現場の視察に訪れたという。次第に発注量も増えていった。樹脂ボールの完成がV字回復の起点となったのだ。苦境が確かな糧につながり、医療機器用の樹脂ボールを一貫生産できる国内唯一の存在となっている。



当時、自社製作した切削加工装置。改良を重ね、微調整が必要なときは今でも使用している。

責任

仕事で都市部の同業者生産現場を目にしたとき、野上さんは思うことがあるという。「豊かな自然の中で、広い工場を持って仕事をできることが何よりいい」と話す。創業当時は、関東方面からの顧客が多かった。月日の流れと共に、物流とードが発展して、地方のハングが無くなっていった。だが、同社のセールスポイントはここではない。柔軟な対応が産む堅い信頼だ。

「他社にできるなら、必ず我々にもできる」をモットーに掲げ、できないものは無いと自負している。他社が避けがかる小ロット、短納期の生産も受注し、顧客との関係を強めてきた。「できない」と仕事を断ったことはない。どうすれば製造可能か調整しながら、メーカーとのコミュニケーションを密にし、製品完成を目指している。そのため、同業者から技術的な相談を受けることも珍しくない。野上さんは「請けた事案絶対に完成させる」と意気込む。



製作している樹脂ボール

結束



医療機器用の樹脂ボール。はめ込むパーツも製作し、精度はおよそ±3/100mm

工作機の性能が日に日に進歩している今日、どこでも同じものを作れる状況にある。ただ、生産となると話がかわってくる。量産に移行するとき、様々な問題が出るのだ。「成形段階で気がついたことを、顧客にすぐ伝えている」と野上さんは話す。金型メーカーと一丸となって、生産に向かっているためだ。

現在、同社では、社内で金型製造をせず、成形生産を主としている。関東地方からの発注が主だったが、現在は県内の金型メーカーと歩みをとみにしている。量産にあたって何かあった時は、すぐに連絡調整をする。これが非常に好評で、迅速な対応が受注に結びついている。フットワークを活かした精度の高い量産が、次の受注を呼び寄せる。

飛翔

環境に優しい植物由来のバイオプラスチック成形を早々に手掛けた実績がある同社は、車載部品の中でも重要なパーツ製作も手掛けている。

航空機の操縦系統部品製作を控えて、「自社の物が認められると自信になる」と野上さんは話す。妥協を許さないものづくりが、分野にとらわれない活躍を可能としている。

1つの樹脂ボール製作に悩んだ過去から、異物が目立つとされる透明な樹脂ボール製作を得意とし、気泡を自在に入れることができる技術力を手にした。ひたむきにプラスチックと向き合った同社は、次なる挑戦へ翔ける。



代表取締役 野上 壽生さん

有限会社アプラス

- 【代表】 代表取締役 野上 壽生
- 【所在地】 〒037-0308 中泊町深郷田甘木150-46
- 【電話】 0173-57-4123
- 【URL】 <http://www.aplas-aomori.com>
- 【設立】 1990年7月
- 【従業員】 8人
- 【業務】 医療機器用コントロールマウス、樹脂ボール、車載部品、電子機器機構部品・筐体



きょうたい